

【でっかいじゅう】

「でたでた」

とぼくは叫びました。

「出た出た月が、まーるいまーるいまんまるい」

と懐爺は歌いました。

「ふざけてるひまないぞい。こんどのかいじゅうは、でっかいぞい」

「なら、【でっかいじゅう】ですね」

「あいかわらず、いいかげんじゃのう」

「手足が八本ずつ、頭も八つある、無気味な怪獣で、頭には真っ赤な口があって、でっかい牙がやはり八本ずつ」

「むむむ、そのとおりにゃ。たこのかいじゅうかのう」

「鮪の怪獣と思われがちですが、もともとは八岐大蛇（やまたのおろち）です」

「やまだのかかし、のう」

「やまたのおろち、です。〈すさのおのみこと〉が退治して、〈くしなだひめ〉を救い、〈あまのむらくものつるぎ〉を得たと伝えられています」

「かいじいの、うんちくが、またはじまったのう。その〈すさのおのみこと〉とは、わかいころの、かいじいのことかのう」

「そのとおりにゃ、といたいですが、もしそうならわたしの歳は、一千三百歳以上になります」

「けっこうけだらけ、じゃのう」

「ふざけないでください。【でっかいじゅう】がでてきたとは、厄介（やっかい）ですねえ」

「かいじゅうの、よこづなかのう」

「横綱どころか、縦綱くらいの、強さですからねえ」

なんとなく解った気がするが、たしかにいままでぼくの見た、幽霊、妖怪、悪鬼、怪獣などのなかで、いちばん巨大です。

「どうすりゃいいかのう」

ぼくは思案に暮れました。

日も暮れてきました。

「もう遅いですから、明日かんがえましょう」

懐爺は、からだを祠に向ける。

そのからだを、ぼくはひっくりかえして、

「おそいから、はやくかんがえるんじゃ」

「前向きなご発言ですね。なら、寝ながらかんがえましょう」

懐爺はまた、からだを祠に向ける。

その腰を、ぼくは蹴飛ばして、

「かいじいも、まえむきになれや」

「ですから、祠が前」

「ものはいよいよじゃのう」

「金ちゃん、相手は【でっかいじゅう】ですよ。【がじら】でも【りゅうこ】でも【めめめ】でも【げんごえもん】でもありません。そう簡単では」

「わしは、かいじいなら、かんたんだとおもうがのう」

「それはかいかぶりというものですよ」

「わしは、かぶっとるのは、ちんちんだけじゃ」

「ああ、それでおもいだしました。【でっかいじゅう】の苦手がひとつだけあって、それは、おしっこです」

「よくおもいだしてくれたのう」

「ですから、金ちゃん、これからおしっこしないで、たっぷりためましょう。たっぷりたまったら、屋根に登って、そこからおしっこを、【でっかいじゅう】めがけて放水するのです」

「りょうかい、じゃ」

おしっこがたまりにたまった真夜中、満月が照る真夜中、ぼくは家の屋根に登ると、庭の【でっかいじゅう】めがけ放水しました。

【でっかいじゅう】が、でっかい泣き声をあげて、逃走したのはいうまでもありません。

さようなら、怪獣の縦綱。